

世界に広がるシェアのかたち

ユーラシア西部・アフリカ編

フランス共和国 ドルドーニュ県

羊たちがシェア

フランスのドルドーニュの小さな村では、羊をシェアしながら飼っている。シェアといっても、羊そのものではなく、自分の羊を知り合いの土地などに放牧するのだ。放牧することで羊は草を食べられるし、その土地の草がきれいに短くなる。更に糞が栄養にもなり、お互いにいい効果が得られる。知り合いのおばあちゃんは、家の窓から羊を眺めている時間が良いのだと言う。羊の首についているベルが、また良い音で鳴る。

くろだ みさと
黒田 美郷さん…フランス文化や料理に興味があり、ワーキングホリデーザを使い1年間フランスへ渡る。現在は、そのフランスでの経験を生かしながら日本で料理人として働く。



トルコ共和国 イズミル県

動物と人間が街をシェア

トルコで一番身近に感じたシェアは、“動物たちとの街中のシェア”です。トルコの Alsancak という街では、驚くほど野良犬や野良猫がたくさん街中を歩いています。人を襲うこともなく、無秩序に糞をすることもなく、車を避けて歩き、芝生や日の当たる歩道で寝ています。彼らは野生ではなく、耳にタグを付けられて管理されていますが、何気なく人間と共に街中で生活しています。動物と人間が秩序を持ってシェアできているのは、とても心温まる光景ですよ。

あづま だいすけ
黒 大輔さん…現在、トルコにて電子技師として働く。東西の文化が交じり合う国トルコで、動物と人間が街という空間を秩序を持って共有しているということに気付く。



エチオピア連邦民主共和国 アディスアババ市

美味しいの感動をシェア

エチオピアのレストランで食事をする、よく食べ物やお酒を勧められる。現地の人が、自分が頼んだものを勧めてきてくれて、その食事をシェアする。自分の食文化を知ってもらいたいという気持ちと、美味しいという感動をシェアしたいということから、勧めてくれるのだと思う。日本では、遠慮という気持ちが働いてなかなかないことだ。遠慮や謙遜は日本人の美徳だとは思いますが、それが密なコミュニケーションを阻害している面も否めない。

かわさき れいじ
川崎 麗児さん…在学中、バックパッカーとしてアジア・アフリカ諸地域を旅する。旅の途中、日本と諸外国における様々な文化や国民性の違いを肌で感じる。現在、日本にて会社員として働く。



モザンビーク共和国 マニッカ州

大切なものを大切に共有

学校に隣接された教員宿舎での生活では、“水と子供”をシェアする。20世帯と生徒300人が住み、井戸が3つしかない。十分な水を得ることができないということは、風呂なし、飯なし、快適なトイレなしの生活がそこにあることを意味する。水を確保するため、仕事をしている人は、していない人に頼み、仕事をしていない人は、子供に命令する。その結果、子供もコミュニティーで共有される。親が育てるのではなく、コミュニティーが子供を育てる。物質的な貧さを、豊かなコミュニティーが補う。モザンビーク共和国では、大切な物を大切に共有する。

まつもと しゆん
松本 峻さん…アフリカ南部のモザンビーク共和国にてボランティア教師として生活した経験を持つ。現在は、日本の教育機関で教師として働く。

